



生士による歯肉縁下の歯周治療が必要となります。そして治療によって炎症のない健康で安定した状態に回復することが出来ても一度失った歯周組織は二度と元の状態には戻らないのです。

### 歯周病の進行

皆さんは歯肉炎と歯周炎が違うことをご存知ですか。歯周病は歯肉炎と歯周炎に分けられます。両者の違いや歯周病はどのように進行し治療するかお話しします。

### 歯肉炎と歯周炎の違い

歯肉炎は炎症が歯肉に限局し歯周組織(歯を支えている骨や結合組織など)の破壊が見られないもの、歯周炎は歯周組織の破壊が進行したものに分けられます。

歯肉炎は歯磨きや歯科医院でのクリーニングで歯面に付着したバイオフィルム(細菌の集合体)を機械的に除去することにより健康で正常な状態に戻すことが可能です。しかし、歯周炎に進行し歯周組織が破壊されると歯科医師または歯科衛

歯肉炎は必ずしも歯周炎に進行していくわけではありませんが、歯周炎は必ず歯肉炎から始まります。歯肉炎のうちにバイオフィルムを除去し、炎症をコントロールすることによって歯周炎への移行を食い止めることがとても大切です。

ここで歯周病菌に関する論文を紹介します。

『Transmission of Porphyromonas gingivalis between spouses (夫婦間での歯周病菌の伝播)』

【目的】夫婦間におけるプロフィロモナスシンジパリス(歯周病菌:P.g.)の伝播の可能性を研究すること。

【対象者と方法】重度歯周炎に罹患している18人の患者被験者とその配偶者の歯周ポケット内の菌からP.g.菌を分離しDNAを分析した。

【結果と考察】18組のうち10組が夫婦揃ってP.g.に感染していた。そのうち8組が更なる研究に参加し臨床検査と細菌学検査が行われた。8人は重度の歯周病で配偶者のうち5人は歯周病と診断された。細菌学的評価によって8組の夫婦それぞれのP.g.が持つDNAパターンはすべて異なるが、6組の夫婦ではP.g.のDNAパターンが一致した。この結果

からP.g.菌は配偶者間で伝播する(歯周病菌は夫婦間で感染する)ことが示唆された。

ほぼすべての人の口腔内から多かれ少なかれ歯周病菌は見つかります。しかし、歯が萌出していない赤ちゃんの口腔内には見つかりません。歯周病菌は家族間、親子間への伝播が考えられ

ます。例えば母親が歯周病を発症している場合、父親と子供に歯周病菌が伝播している可能性は高いのです。さらに長男が母親の遺伝的要素を多く引き継いでいたとすると父親や他の子供より歯周病の防御機能に欠け、今後歯周病を発症する可能性が高く徹底した予防処置が必要になります。しかし

実際は遺伝的要素を誰が受け継いでいるかの判断は困難なため家族全員が予防処置を受ける必要があるのです。歯周病菌が伝播しても必ず歯周病を発症するわけではありません。大事なことは正しい歯磨きと定期的な歯科医院でのクリーニングで、口腔内の健康を維持していくことだと言えます。

## ヒルマヤスアキのホットとひと息

### 春の別れ 2011

ひるま矯正歯科では、この春に2つの別れがありました。一つ目は、受付責任者として勤務していた川上沙耶香さんが新しい生活のため故郷に戻る別れです。ひるま矯正歯科の受付は予約や会計の管理だけでなく、治療データベースや治療経過写真の管理、保険請求の管理など複雑で責任が重く、院長からのお小言をもらう機会も気苦勞も多い部署でしたが、川上さんはいつも真摯に職責を果たしてくれました。またムードメーカーとしても活躍してくれましたので院長にとってはとても頼りになるトモニアム仲間でした。川上さんが退職されるのはとても寂しい事ですが、桜の開花前線が川上さんの故郷に届く頃、希望に満ちた新しい生活が始まっていると思えば嬉しい別れです。



受付の川上です。今までありがとうございました。

そして二つ目は ISO9001 との別れです。当院では 20 年以上続けた矯正歯科診療システムを虫歯と歯周病の予防と矯正歯科治療を両立するシステムに変えるため、ISO9001 による外部評価を利用し診療システムの再構築、品質管理を行いました。2008 年に ISO9001 認証取得、2009、2010 年と維持審査を受けてきた事によりひるま矯正歯科のシステムは常に外部評価と改善が繰り返され、目標である虫歯と歯周病予防と矯正歯科治療の両立に少しずつ近づく事が出来ました。一方、ISO9001 の基本的なコンセプトが製造業の品質管理である事から、全ての診療に ISO が要求する事項を適用するのが難しい事、適用できない部分に対しても認証を維持するために膨大な時間と経費がかかる事から認証の更新を行なうか否かの検討を繰り返してきました。その結果、2011 年の更新を行わず、ISO9001 と別れる事を決めました。今後は ISO 認証で学んだ PDCA サイクルによるシステムの継続的な改善、文書管理、定期的な内部監査、マネージメントレビューなどの ISO システムを利用しながら、さらに診療システムを改善する独自の取り組みを行ないます。ISO との別れをひるま矯正歯科診療システム確立に向けた第 2 のステップと捉えます。

これからも毎年桜の開花が伝えられる頃、いくつかの別れを経験しなくてはならないでしょう。でもその別れを嬉しいもの、次のステップと考え患者さんとトモニアムながらひるま矯正歯科を少しずつ成長させていきたいと思ひます。